

ポール・セザンヌ作《青年と頭蓋骨》に関する一考察 ——宗教的なものとの関連をめぐって——

鈴木創太（京都大学）

ポール・セザンヌは晩年にカトリックの信仰を強めたことが知られるが、その期間においても一般的な宗教主題は少数に留まる。その中で 1896-98 年制作の《青年と頭蓋骨》（バーンズ財団）は「ヴァニタス（虚栄、俗世の栄達の儚さ）」というキリスト教的観念を描いた数少ない作例であり、画家自身が気に入った希有な作品でもある。

本作はこれまで、「ヴァニタス」の図像的伝統を念頭に、身近な者の死という画家の個人史や、近代化に伴って消失していく南仏の文化・風土という社会史的観点と結びつけて論じられてきた（Reff 1983; Athanassoglou-Kallmyer 2003）。一方でセザンヌ自身の信仰や、宗教的思想、それらと本作の制作との結びつきについては十分に議論されていない。

そこで本発表では、セザンヌの書簡や晩年に親交のあったジョワシャン・ガスケやエミール・ベルナールらによる回想を手掛かりに、晩年のセザンヌが「絵画の修道僧（moine de la peinture）」という側面を持っていた事、つまり自身の信仰と芸術制作が結びついていた事を明らかにする。さらに、セザンヌはなかでも『旧約聖書』に登場する預言者モーセに芸術家としての理想を見ていた事が 1903 年のアンブロワーズ・ヴォラール宛書簡から確認される。ドレフュス事件の最中であったフランスの社会情勢に鑑みると、このような発言は画家の親ユダヤ的心情の現れである可能性がある。そこで本発表では、セザンヌを反ドレフュス派とする従来の説を再考し、書簡や交流関係等の精緻な分析を通じ、セザンヌが元来抱いていた親ユダヤ的心情と事件を機に前景化した反ユダヤ的心情の間で葛藤していた様子を浮彫りにする。

以上のような手続きを経て確認された知見に基づき、《青年と頭蓋骨》について改めて分析を行う。本作の青年の頬杖をつく姿勢は「メランコリー（憂鬱質）」の図像的伝統を汲むものと理解される。この概念はルネサンスの人文主義者によって芸術家に求められる創造的気質と結びつけられ、いわゆる「芸術家のメランコリー」という概念を派生させた。本発表では《青年と頭蓋骨》をこの「芸術家のメランコリー」の表象として改めて位置づける。その上で、青年の頭部に重なり角のように見えるカーテンの枝模様について、ゼバルト・ベーハム作《モーセとアロン》（1526 年制作）を一例とするモーセの表現伝統との比較を通じ、《青年と頭蓋骨》の枝模様がモーセを示唆していることを新たに示す。セザンヌにとって、啓示を受け、民を導き約束の地を目指すモーセは芸術家としての理想像であった事から、《青年と頭蓋骨》のカーテンの模様によるモーセへの言及は、創造的憂鬱を抱えながらも芸術上の理想に向けて前進するだろう青年に、自身を仮託していると解釈できる。

以上から、本作が「ヴァニタス」に加え、芸術家としての自己表象、ないし、自身のあるべき姿の表象という重層的な意味を持っていると結論づける。